

「日本人を魅了してきたドイツの書物 ～日独交流150周年記念稀観書展示会～」

木村 あい



本学図書館の検索コーナーの右側の壁にきれいな絵葉書が展示されているのをご存知でしょうか？これらは過去に図書館で開催された貴重書の展示会についてのものです。是非、一度じっくり見てください。

その中で今回私が紹介するのは、日独交流150周年記念として2011年に行われた「日本人を魅了してきたドイツの書物」です。この展示会はフリードリッヒ・オイレンブルク伯爵が1860年に日本を訪れ、その翌年に日独修好通商条約が調印されてから150周年になることを記念して開催されたものです。ゲーテンベルク印刷の聖書やルターの「ドイツ語完訳聖書」、カント、ヘーゲル、マルクスの著作物、ゲーテ、シラー、ハイネの文学作品、その他に、ドイツで出版されたケンペルの『日本誌』、ジーボルト（通称シーボルト）の『日本』、オイレンブルクの『東アジア遠征記』など併せて63点の資料が出展されました。私がこの展示会に出展された資料の中で特に気になったのは、ジーボルトの『日本』です。

ドイツの医者・博物学者として有名なフィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト（Philipp Franz von Siebold, 1796-1866）は、バイエルンのヴェルツブルクに生まれ、1822年、オランダ東インド会社の衛生官となり、翌1823（文政6）年に長崎出島商館の医師として来日しました。1828（文政11）年の帰国にあたり、我が国の国禁を犯して高橋景保より受け取った地図などを携行しようとしたことが発覚し（所謂シーボル



ト事件)、翌年日本を追放されて本国に帰りました。しかし、1859（安政6）年にオランダ貿易顧問として再び来日して、1861（文久元）年には徳川幕府の外交顧問となりましたが、翌年ドイツに戻り、1866年にミュンヘンで没しました。

この展示会を通じて、多くの方々にドイツという国が遠いようで実は私たちにとって身近な存在であるということ、そして、日本とドイツが様々な交流の末にこれまでに築いてきた歴史の流れを、理解してもらえたかと思います。今後もここ京都外国語大学で開催される展示会に一度是非、足を運んでみてください。

きむら あい（日本語学科4年次生）